

星のある風景：永井荷風と国木田独步

涌 井 隆

歌手中島みゆきが作詞作曲した歌に「地上の星」というものがある。一番を引く。

風の中のすばる / 砂の中の銀河 / みんな何処へ行った 見送られることもなく /
草原のペガサス / 街角のヴィーナス / みんな何処へ行った 見守られることも
なく / 地上にある星を誰も覚えていない / 人は空ばかり見てる / つばめよ高い
空から教えてよ 地上の星を / つばめよ地上の星は今 何処にあるのだろう

二番にはジュピターやシリウスという星の名が出てくる。この歌詞の意味は、地上に沢山の星（スターあるいは英雄）がいるのに人は空ばかり見ていて気づかないということらしい。NHK のドキュメンタリー番組（「プロジェクト X」）の主題歌として書き下ろされ、「無名の人々の光を歌にしてください」という要望に答えたものなので間違いはない。⁽¹⁾ しかし、私はこの歌詞に強い違和感を感じる。一体、人は空に、より正確には夜空に関心を持っているのだろうか。東京の夕方空に金星が出ていたとしてどれだけの人が目を留めるだろうか？ 光害の少ない山に登ってペガサス座の輪郭をなぞることが出来る人はどれほどいるだろうか？ 清少納言の「ほしはすばる」を知っていたとしても、夜空のどこにすばるがあるか知っているととは限らない。大抵の人は、ハリウwoodsのスター、スポーツ界のスター、あるいは政界・実業界のスターの言動を追うことに忙しいのではあるまいか。自分とは直接関係のないそのような大きな世界での出来事にマスメディアを通じて関心を向けるのは、自分の小さな世界からの逃避であり気晴らしである。殆どの人の関心はそうように地上の世界に向かっていているように見える。もっと大きな天の川銀河に興味を持っているようには見えない。

何故そうなのか、その理由ははっきりしている。年々光害がひどくなっていて、星空を見たことがない人々が急激に増加しているからだ。それは 2001 年 3 月 11 日に東京渋谷の天文博物館五島プラネタリウムが閉館した時にそれほど大きな反響がなかったことからでも分かる。星が見えなくなってしまった都会にせめてその代替物をと存在しているプラネタリウムは、本物を見た経験がある人にとっては、ある程度価値があるのかもしれないが、その経験がない人にとっては、無用の長物にすぎないのだろう。しかし、日頃星空を見慣れていない人が何らかのきっかけで満天の夜空に遭遇すると、大きな衝撃を受けるという事例は幾つか報告されている。光害に興味を持つものに広く知られている例に、1994 年 1 月 17 日に起こりアメリカカリフォルニア州のノースリッジに大き

な被害をもたらした大地震がある。夜中に起こったその大地震はノースリッジ周辺に大規模な停電をもたらし、突如現れた満天の星空に恐怖を感じた住民がいたそうだ。⁽²⁾

もちろん、世界の大都市の光害はここ数十年で激しくなった現象であって、時代をさかのぼれば都会でも天の川が視認できるほど十分夜空は暗かった。明治42年に「新小説」に発表された永井荷風の「すみだ川」には次の一節がある。

そこ此処に二三軒今戸焼を売る店にわづかな特徴を見るばかり、何処の場末にもよくあるような低い人家つづきの横丁である。人家の軒下や路地口には話しながら涼んでゐる人の浴衣が薄暗い軒燈の光に際立って白く見えながら、あたりは一体にひつそりして何処かで犬の吠える声と赤児のなく声が聞こえる。天の川の澄渡った空に繁つた木立を聳やかしてゐる今戸八幡の前まで来ると、羅月は間もなく並んだ軒燈の間に常盤津文字豊と勘亭流で書いた妹の家の灯を認めた。家の前の往来には人が二三人も立ち止まつて内なる稽古の浄瑠璃を聞いてゐた。(『全集』第6巻213頁)

土手があって、田んぼがあり、まだ江戸情緒が残っている東京、そんな東京への懐かしさが充満している作品であるが、それが活写する風物は地上に留まらず、天の川に及んでいる。この小品を読者は幾通りにも読むだろう。隅田川の風物詩と読んでもよいし、登場人物が織り成すドラマに世代間の葛藤とそれを越える悠久の時の流れを感じ取っても良い。芝居の世界に魅せられ立身出世に背を向けようとしている青年長吉と、それに反対する母の豊、若い頃似たような生き方をして、親に勘当され、俳諧師として生計を立てている長吉のおじである羅月、長吉の幼馴染で芸者となって長吉の手に届かないところに行こうとするお糸。隅田川という美しい背景がなくても十分興味深い人間ドラマである。しかし、この小品を名作にしているのは何よりもその情景描写の美しさではないだろうか。確かに、上の引用に見られるように語り手は人と街並みを大きな自然の中に巧みに配置し木版画のような美しい絵を見せてくれる。だが、この語り手が特異なのは、あたかもアマチュア天文家であるかのように、空気の透明感を感じ取り、月や星の見え方にどのように反映しているか描写しているところにある。次は同じく「すみだ川」の第二章からの引用である。

残暑の夕日が一しきり夏の盛りよりも烈しく、ひろびろした川面一帯に燃え立ち、殊更に大学の艇庫の真白なペンキ塗の板目に反映していたが、忽ち燈の光の消えて行くやうにあたりは全体に薄暗く灰色に変色してきて、(中略)堤の上に長く横たはる葉桜の木立は此方の岸から望めば恐ろしいほど真暗になり、(中略)、河面は先刻よりも一体に明るくなり気味悪い雲の峰は影もなく消えてゐる。長吉は其の時長命寺辺の堤の上の木立から、他分旧暦七月の満月であらう、赤みを帯びた大きな月の昇りかけてゐるのを認めた。空は鏡のや

うに明るいのでそれを遮る堤の木立はますます黒く、星は宵の明星の唯一つ見えるばかりで其の他は尽く余りに明るい空の光に掻き消され、横ざまに長く棚曳く雲のちぎれが銀色に透き通って輝いてゐる。(中略) 長吉は気後れのしたばかりか、顔を見られるのが厭さに、一散に通りの方へと遠ざかった。円い月は形が大分小さくなつて光が蒼く澄んで、静かに聳える裏通りの倉の屋根の上、星の多い空の真中に高く昇って居た。(『全集』第6巻225頁)

この一節は長吉とお糸との逢引の場面であるが、主役が星と月であるかのように錯覚してしまいそうだ。語り手は締めくくりで月の位置を示し、時間の経過を伝える。宵の口から夜更けまで地上の遠景から天体までがどのように見えるのか克明に書き込まれているので、空気の透明度が手に取るように分かる。長吉とお糸は満月の下で、もう一度会う約束をして別れるのだが、二人が次に会う時にはお糸は芸者の装いをしており、長吉はあれが最後だったのだとを感じる。この満月の下の逢引は、後に長吉が観る歌舞伎「小袖曽我薊色縫（こそでそがあざみのいろぬい）」で謡われる清元の一節に受け継がれる。

朧夜に星の影さへ二つ三つ、四つか五つか鐘の音も、もしやわが身の追ってかと、忍ぶなら、闇の夜は置かしやんせ、月に雲のさはりなく、辛気待つ宵、十六夜の、内の首尾はエーよいとのよいとの。聞く辻占にいそいそと雲足早き雨空も、思ひがけなく吹き晴れて見かはす月の顔と顔

(『全集』第6巻241頁)

長吉は舞台に灯された満月を見て、一年前の逢引を思い出す。また、読者はこれを読んで作者が長吉とお糸の逢引を十六夜の夜に設定したのは「十六夜」で知られるこの唄によって江戸の情緒を醸し出すためだったのだらうと理解する。すべては荷風の計算であり、彼の発想は江戸なのだが、彼の自然描写は江戸ではない。自然科学の発達がその原動力であった言文一致運動を経たからこそ可能になった描写である。

花鳥風月でなく、人物と情景の配置である絵画的写生でもない自然描写、語り手がそこにいて、空気の透明度と色の濃淡までも教えてくれる自然描写が日本文学にいつどのように出現したのかについては、北野沼彦が次のように述べている。

日本の近代文学史上における画期的な事象の一つは、自然観の変革による新しい自然文学の出現である。それはやがてジャンルの枠を超えて日本人の自然観そのものを変え、以後の日本文学の自然描写に決定的な変革をもたらすほどの画期的なものであった。この新しい自然文学の出現をはじめに提唱し、その指針を提示したのは、民友社を創立したジャーナリスト徳富蘇峰の文学評論であり、それを「武蔵野」という実作によって創始したのが国木田独歩である。

(北野沼彦 119頁)

さらに詳しく書くならば、そのような自然描写の可能性に直接目を開かせたのは二葉亭

四迷が訳したツルゲーネフの短編である。事実、独歩は「武蔵野」の中で、何度かツルゲーネフに触れている。

かかる落葉林の美を解するに至ったのは近來のことで、それも左の文章がおおいに自分を教えたのである。「秋九月中旬といふころ、一日自分が樺の林の中に座していたことがあつた。今朝から小雨が降りそそぎ、その晴れ間にはおりおり生ま暖かな日かげも射してまことに気まぐれな空合ひ。あわあわしい白ら雲が空ら一面に棚引くかと思うと、フトまたあちこち瞬間雲切れがして、むりに押し分けたような雲間から澄みて伶俐し氣にみえる人の眼のごとくに朗らかに晴れた蒼空がのぞかれた（以下省略）。」すなわちこれはツルゲーネフの書きたるものを二葉亭が訳して「あいびき」と題した短編の冒頭にある一節であつて、自分がかかる落葉林の趣きを解するに至ったのはこの微妙な叙景の筆の力が多い。これはロシアの景でしかも林は樺の木で、武蔵野の林は槲の木、植物帯からいうとはなはだ異なっているが落葉林の趣は同じことである。自分はしばしば思うた、もし武蔵野の林が槲の類いでなく、松か何かであつたらきわめて平凡な変化に乏しい色彩いちやうなものとなつてさまで珍重するに足らないだろうと。（『全集』第2巻 69-70 頁）

松ではだめで槲のような落葉樹だから斬新な自然描写が出来ると書いているが、よく考えてみるとそうではない。松のような常緑樹でも光の当たり方、空気の透明度などによって色の見え方が違うし、雨風は音の情報も加える。国木田自身実際そのような細部を描出しているのだが、花鳥風月的な情景でないというところを強調せざるを得なかったのかもしれない。「武蔵野」の半ばに、夏の武蔵野を散策する語り手を訝つて「桜は春咲くこと知らねえだね」とおせっかいをやく婆さんを登場させていることからそれは窺い知れる。「武蔵野」という地名を作品名にしたこと自体、そのような日本の伝統的な自然観に対抗しようとする意図があつたのだろう。

日本の太平洋側では、秋から冬にかけて空気の透明度が上がり、星空が美しくなる。雨が降ったり風が吹いたりしたあとも空気中のちりが追い払われ透明度が上がる。このことは光害の中に暮らす今日の都会人には忘れられてしまったかもしれない。だが、「武蔵野」の語り手は、空気の透明度に注意をはらう。

九月七日——「昨日も今日も南風強く吹き雲を送りつ雲を払い、雨降りみ降らずみ、日光雲間をもるるとき林影一時に煌めく、——」

十一月四日——「天高く氣澄む、夕暮に独り風吹く野に立てば、天外の富士近く、国境をめぐる連山地平線上に黒し。星光一点、暮色ようやく到り、林影ようやく遠し」

秋の中ごろから冬の初め、試みに中野あたり、あるいは渋谷、世田ヶ谷、また

は小金井の奥の林を訪うて、しばらく座って散歩の疲れを休めてみよ。これらの物音、たちまち起こり、たちまち止み、しだいに近づき、しだいに遠ざかり、頭上の木の葉風なきに落ちてかすかな音をし、それも止んだ時、自然の静蕭を感じ、永遠の呼吸身に迫るを覚ゆるであらう。武蔵野の冬の夜更けて星斗闌干たる時、星をも吹き落としそうな野分がすさまじく林をわたる音を、自分はしばしば日記に書いた。風の音は人の思いを遠くに誘う。自分はこのもの凄い風の音のたちまち近くたちまち遠きを聞きては、遠い昔からの武蔵野の生活を思いつづけたこともある。（『全集』第2巻66、67頁）

武蔵野の渋谷村からみる冬の星空はさぞ美しかったのだろう。21世紀に入った今日では全く想像できないことではある（現在の東京渋谷はおそらく日本で一番光害がひどい場所であろうから。）国木田独歩の小品の多くは、語り手の回想あるいは追憶として読者に提示される。「忘れぬ人々」や「源叔父」がそうであるし、「武蔵野」もそうである。「武蔵野」の場合、それほど昔の話ではなく、その短い時間の経過によって東京の夜空が明るくなった訳でもないのだが、今日この作品を読むと、明治29年と現在の差が一層大きく感ぜられる。

国木田独歩には「星」と題された幻想的な小品がある。「都に程近き」ところに住む詩人が、秋の枯葉を集め数夜に渡って焚き火をしたところ、冬の銀河から恋する恋人が暖を取りに降り立ち語らう。最後の夜にその詩人に感謝の言葉を述べに彼の寝室を訪れると、

西詩「わが心高原にあり」ちょう詩のところ出でてその中の「いざさらば雪を戴く高峰」なる一句赤き線ひかれぬ⁽³⁾

という状況を目撃する。それを見た乙女の星は

早くも露の涙うかべ、年わかき君の心けだかきことよと言ひ、さて何事か詩人の耳に口寄せて私語きおわれば恋人たち相顧みて打ちえみつ、詩人の優しき頬にかわるがわる接吻して、安けく眠りたまえと言ひ言い出で去りたり。

（『全集』第2巻19頁）

翌朝詩人は昨晚見た夢を思い起こす。その中で、乙女は彼を丘に誘ひ、お前は恋を望むのか、自由を望むのかと彼に問い、彼は、「自由の血は恋、恋の翼は自由なれば、われその一を欠く事を願わず」と答えると、乙女が微笑み、西の空を指してよく見ろと言ひ捨て消えうせる。彼は、西の空に二つの星をみとめるが、すぐに薄明が始まり、連山の雪が姿を現す。そこで彼は、「わが心高原にあり」をうたい、「いざさらば雪をいただく高峰」のところで全身を輝かせながら自由の化身とも見える。

星になった恋人達が会おうというのは中国から日本に伝わった七夕伝説を連想させる。しかし、ベガとアルタイルは冬の深夜には見えないので作者独自の翻案だろう。何

故冬でなければならぬのかは、詩人の謡うバーンズの詩と関係あるだろうが、日本の太平洋側で星が一番きれいに見えるのが空気の透明度が高い冬であるという事実と無関係でないかもしれない。「夜はいよいよふけ、大空と地と次第に相近づけり。星一つ一つ梢に下り、梢の露一つ一つ空に、帰らんとす。万籟寂として声なく、ただ詩人が庭の煙のみいよいよ高くのぼれり」というくだりは、冬の星空を髣髴させる。

注

- (1) http://www.nhk.or.jp/projectx/song/song_top.html/
- (2) <http://www.darksky.org/> <http://www.letstalkstars.com/> 一般的に普通の人の天文学についての知識は驚くほど低い。2003年に火星が大接近したとき観望会で望遠鏡を覗かせてあげた人は、何百万光年もかなたの光ですね、と言っていたし、2001年のしし座の流星群の時、ある人は6等星が見える満天の空を見て、あれだけ星の間の間隔が狭いとぶつかってしまうのではないかと心配していた。
- (3) Robert Burns 作詞のスコットランド民謡 “My heart’s in the Highlands”

参考文献

- 海部宣男 『宇宙を歌う：天文学者が訪ねる歌びとの世界』 中央公論新社 1999
- 川村暁生 『日本文学から「自然」を読む』 勉誠出版 2004
- 北野沼彦 『宮崎湖処子・国木田独歩の詩と小説』 和泉書院 1993
- 国木田独歩 『定本国木田独歩全集』 学習研究社 1964
- 高橋和夫 『日本文学と気象』 中央公論社 1978
- 永井壮吉 『荷風全集』 岩波書店 1992
- Turgenev, Ivan *Sketches from a Hunter's Album* tran. by Richard Freeborn London: Penguin Books, 1967